

# 中学校英語科における 「書くこと」の力の育成を目指した授業づくり —PCPPモデルを用いて—

学籍番号 189977  
氏名 津田 龍平  
大学院主指導教員 寺嶋 浩介

## 1. 背景と目的

本実践研究では、中学校英語科における「書くこと」に注目した。その中で、新学習指導要領における「書くこと」の定義と内容や指導法を踏まえ、「書くこと」の力の育成を目指した授業作りをするために、PCPPモデルに注目した。PCPPモデルとは、提示(Presentation)・理解(Comprehension)・練習(Practice)・産出(Production)の流れからなる内容中心の指導方法(村野井2006)である。

本報告書では、筆者がPCPPモデルを用いて行った授業実践において、「書くこと」に関する言語活動に焦点を当て、実践、改善を行う過程を通して、「書くこと」の力を育むために必要な条件を明らかにすることを目的とした。

## 2. 各章の内容

本報告書では、「書くこと」の活動をスモールステップ化して、チャンツを用いた単語学習を行い、学習したことを活用する英作文問題を取り入れた授業実践を行った(第2章)。そこで生じた成果と課題を踏まえ、PCPPモデルを用いるに至った経緯について整理し、「自分自身に関する題材」に関する自由英作文を取り入れた授業実践(第3章)、「日常的な題材」に関する自由英作文を取り入れた授業実践(第4章)を行った。

第2章では、筆者が実習校で実施した「英語に関する意識調査」から、生徒は「読むこと」と「聞くこと」を得意であると考えていたため、これらを活かす学習法としてチャンツに注目し、単語学習に取り入れた。チャンツとは、英文を一定のリズムに乗せて発音するものである。加えて、英作文における「書くこと」の活動をスモールステップ化した。生徒の授業ワークシートを分析した結果、それぞれの問題の正答率と記述率の増加が見られた。しかし、本時のねらいの達成に向けて設定した活動をそれぞれ関連づけた授業設計・実施を行うことができなかった。

第3章では、PCPPモデルに基づいた授業設計を行い、同モデルの各段階において本時のねらいの達成に向けた活動を設定し授業実践を行った。同モデル「産出」では、「自分自身に関する題材」をもとに英作文を書く活動を設定し、プレ・ポストアンケートと筆者による授業ワークシートの評価によって効果検証を行った。その結果、自由英作文を書くことに必然性を持たせるためのティーチャートークや具体的な場面設定生徒が有効な手段であることが分かった。一方で、ヒントの提示

の仕方が課題となった。

第4章では、前章の課題を踏まえ、PCPPモデルの各段階の活動を改善した上で授業設計・実践を行った。同モデル「産出」において、「日常的な題材」をもとに英作文を書く活動を設定し、筆者による生徒の授業ワークシートの評価によって効果検証を行った。その結果、同モデル「理解」において練習問題を行い、新出文法の意味や使い方を何度も押さえることや、「日常的な題材」として、生徒の誰もが知っているものや興味を引くものを扱うことが有効であることがわかった。一方で、同モデル「理解」において新出文法に関する知識のアウトプットをねらいとして設定したアクティビティの難易度が高くなってしまった。

以上の授業実践とその成果と課題に基づき、第5章では、PCPPモデルを用いた授業設計の改善を行うとともに、「書くこと」の力を育むための授業に必要な条件について検討した。

### 3. 「書くこと」の力を育むために求められる授業の条件

本研究の成果・課題より、「書くこと」の力を育むために求められる授業の条件について以下に述べる。

#### 1. 文法事項の反復練習

「書くこと」の力を育むにあたっては、生徒が文法事項を理解した上で言語活動を行う必要がある。本実践では、文法事項の理解をねらいとして、同モデル「理解」において新出文法事項を取り扱った練習問題を数多くこなした。その結果、同モデル「産出」の自由英作文において、生徒は新出文法を正しく用いて英作文を書くことができた。このことから、文法事項の反復練習は新出文法の理解を促し、それらを言語活動の中で運用させるために有効な手段である。

#### 2. 思考を伴うヒントの提示

英文を書く活動は生徒にとって難しい活動である。自由英作文は中でもとりわけ難易度の高い活動である。支援の1つとしてヒントの提示が考えられるが、モデル文の提示だけでは、それらの丸写しで終わってしまい、生徒の思考は働かない。そのため、ヒントとして提示した語句や単語を生徒自身が適切な形に変形する（過去形の単元であれば、現在形の動詞をヒントとして提示し、生徒自身にそれらの動詞を過去形に変形させる等）といった、思考のプロセスを伴わせるヒントの提示が必要である。

#### 3. 必然性のある文脈における生徒自身に関する英作文の実施

文法事項を意図的に使って言語活動を行うことは、最終的にその知識を手続き的知識に変えていくために必要なプロセスであり、目標言語の習得のために必要である。しかしながら、日常生活において英語を使う環境下でない生徒にとって、文法事項を意図的に使って言語活動を行うことは難しい活動となる。そのため、これらの活動を行うにあたっては、ティーチャートークなどを用いて生徒にとって身近な場面を教師が設定し、「書くこと」に関する言語活動を行うことに必然性を持たせることが求められる。このようにすることで、生徒は言語活動に意欲的に取り組むことができる。